

はじめに

哲学の京都学派は、いわゆる15年戦争の期間を通じて、政治哲学に関する論を提供し続けた。これらを捉えて、京都学派の戦争協力を説く論者も多い。確かに、京都帝大出身の近衛文麿が首相となると、西田をはじめとして、京都学派の面々は戦争遂行に関与したことは否定できない。しかし、彼らの真意はどこにあったのか、また、それらの論の意義と問題点を再考する必要があると考える。今回は田辺元、三木清、高山岩男の論を取り上げる。

1 田辺元の「種の論理」について

種という民族共同体とその構成員たる個人の関係から、国家という類的存在のあり方を提示したのが、「種の論理」である。昭和の初期、我国ではクーデター未遂や暗殺事件が頻発し、政党間対立、軍部内部での対立等が激化していた。つまり、種的基体（民族共同体）内部での争いが絶えなかったのである。これを田辺は民族的呪縛によるものと考えた。即ち、個は種に帰属し種のために活動するが、種に危機が訪れたとき、個は種を救済しようとして、各個は対立し合う。この対立は個を支配しようとする種の意志に基づくものであるため、激しさを増す。こうした状況は、本来、統一体である種の自己疎外態であると田辺は考えた。これを克服して、種と個が本来の姿を取戻すには個が種を対自化して、開かれた世界へ移行することが必要である。具体的には普遍性を有する類たる国家へと至ることを意味する。

当時、世界的趨勢として、民族主義が台頭していた。これは我国とて同様であった。しかし、こうした民族主義を止揚して、人類的国民国家を建設することが、田辺の主意であったと解される。こうした田辺の態度はヘーゲルの国家解釈への批判、ハイデッカーのナチズム支持への非難に見て取ることができる。田辺にとっての国家とは「各個が摂取される」領域であり、それは同時に各個の道義的実践によってつくられるものである。民族の束縛を脱した「開かれた世界」を国民が建設する、そうした「あるべき国家」を示したのが「種の論理」であった。

2 三木の「協同主義」について

三木は近衛のブレーン・トラストである昭和研究会に積極的に関わった。ここで彼は「技術論」「構想力」の論理といった哲学的思索を実践に移す。それが協同主義の哲学というフォルムとして示された。人の人たる所以は、「もの作り」にあると三木は主張するが、それは以下のような性質があると彼は考える。「もの」の働きかけであり、作り手（主体）と対象（客体）の一体化によってなされるものである。そして、技術とはこうした主客一体の媒介するものであり、「形」をつくる力「構想力」によって「もの」の形が形成される。そして、それが生産という形に発展すると「社会的身体」つまり、生産主体として、社会的組織によって技術は行使される。このような「もの作り」の組織体は協同関係が妥当すると三木は考える。「もの」への働きかけが重視され、作り手は職能者として尊重される。このような職能関係が企業体にも妥当することから、いわゆる「階級」問題は克服される。このような社会的身体による「もの作り」の共同実行が協同主義であるが、それは「資本主義」の営利主義、「社会主義」の官僚主義

そして「全体主義」の個性の軽視を超越した経済構想であった。これによって三木は「資本主義問題の是正」を企図する。そして、かかる主義に基づき、対外的には東亜の協同を提唱する。（東亜協同体論）この三木の協同主義は、「もの作り」を基本に据え、企業体の公益性を顧慮した点で、重要な提言を含意するものであった。

3 高山岩男の「モラリッシュ・エネルギー」論

高山は高坂正顕ら京都学派四天王と共に、近代超克論を主張した。即ち、西欧中心主義は終焉し、世界は新しい新秩序形成の転換期にあり、西洋の個人主義的近代主義は超克される必要があるとした。そして、日本はアジアの代表として大東亜の共栄圏を構築するべきであるとした。その際、高山が重視したのが国民の「モラリッシュ・エネルギー」である。これはランケの主張したものであるが、「道徳的精力」を意味する。高山によれば、有機体としての国家にそれが備わり、これを他国に向かって主張するものであるとしている。そして、この精力は国民各自に要請されるものであり、高山はその範型を鎌倉武士団に求めている。即ち、承久の変に勝利して、自らの法である御成敗式目を制定した武士たちに、能動的で活発な精神力があると高山は考えたのである。

4 三者の論の光と陰

彼らに共通するのは、京都学派が主張した「歴史哲学」の立場に立っている点である。過去に拘束され、未来にも規定される「今」にありながら如何に歴史形成に参加するか、それがその基本的立場である。彼らは戦時色一色の中で、如何に歴史に関わるかを問い続け、しかもそれを実践に移した。田辺は民族主義の克服を、三木は資本主義問題の是正を、そして、高山は国民の道義的生命力の喚起を唱えた。そして、彼らは戦争への濁流に呑み込まれつつ、歴史の方向を変化させる、あるいは、そうした流れを押し止める実践を行った。ここには、現代にも生かされるべきことが含意されており、これらを門切り型に切り捨てることはできない。国家と民族、営利を至上目的とした資本主義の暴走、アトム化しアパシー化する若者、こうした問題の解決の糸口を彼らの論に見出すことができるからである。

しかし、その主意はある意味で正当であるとしても、彼らの言質は政治的マヌーパに利用された。そこには各個の主張に問題点があったことに起因する。田辺の場合、民族的呪縛を脱した国家を「応現なるものとして」絶対的存在とした。また、この論は国民の実践による国家建設を骨子としていたことから、国民の総動員を基調とする総力戦体制論を基礎付けることになる。そこには後年田辺が認めるように、彼らには「根源悪」があることを看過していた。そして、三木の論は協同性を生産関係から国際関係に拡張した点で問題であった。「もの作り」の主体たる社会的身体論は同質なものの協同が前提とされていた。しかし、東亜関係にこうした同質性を前提とすることは困難である。また、高山は道義の相対性を顧慮していない。道義の基準は各国で異なり、ある国の行為が道義的であるとしても、それを他国に強要することは干渉にすぎない。そして、三者の論に共通している問題は政治のリアリティの欠如であった。三木は終戦直前に、自説の問題点を自戒をもって語っている。即ち自説は「甘い観念論、浪漫的形而上学」であって現実を語ることはできないと述べている。三者の論はまさにかかる指摘が妥当するのである。